

市役所女子職員の悲劇 ～ 地元の祭りで羞恥地獄編 ～

1 祭りの誘い

川上紗良は昨年、地元の市役所に就職した。

社交的な性格で周りの職員とのコミュニケーションも良好。

仕事でも、他の職員を積極的に手伝うなど、周囲からも信頼されている。

そんな就職2年目のある日、**同部署の先輩である男性職員の佐野**から、

「9月の3連休に祭りがあるんだけど、必ず参加して欲しいので、ぜひ予定を空けておいて。」
と言われた。

このマチには、40年以上も続く**伝統的な祭り「大臼祭り（おおうすまつり）」**がある。

コロナ禍の影響もあり、一昨年・昨年と2年連続で中止となっていたが、今年は3年ぶりに開催されるとのことだ。

また、この祭りには、**市役所の新人は、よほどの事情がない限り参加しなければならないこととされている**のだそうで、紗良が新人だった昨年は祭り自体が中止となっていたことから、今年が初参加の機会ということで、**ほぼ強制的に参加を通知された**ような形だ。

もともと祭り好きでもあった紗良は、特に引っかかる事もなく、素直に応じた。

その後、同期の職員にも同様に祭りの誘いがあったことが確認できた。

ただ、不思議なことに、男子職員に対してはあまり強制的な誘い方がされておらず、**女子だけが、ほぼ強制的に参加を通知されていた**ことが分かった。

「なんで女子だけ強制なんだろう？」と若干疑問を持ったが、男女共同参画の時代でもある。もともと男くさいものというイメージのある祭りに、できるだけ華を添えたいという事情もあるのだろうと、自分なりに納得していた。

ちなみに、**同じ部署にいる新人女性職員の島崎梨花**にも、同様に参加の通知があった。

また、**同じ部署で3年ほど先輩にあたる女性職員の森野弥生**は、新人時代にも参加経験があり、今年は裏方的な役割で参加するようだ。

大臼祭りでは、**大きな櫓（やぐら）が組み、そこに巨大な臼を設置して、餅つきをする。**

「大臼神使（おおうすしんし）」と呼ばれる若者たちが法被姿で櫓に上がって巨大な臼を囲み、餅をつくのである。

市役所の新人職員も自動的にこの大臼神使の一員となり、当日は、大勢の市民の前で櫓に上がり餅つきをすることになるのだ。

（・・・祭りに参加するだけじゃなくて、団体にも所属するのか。ちょっと面倒くさいなあ…）
そんな思いがよぎりながらも、せっかくだから楽しもうという気持ちで、紗良は当日を迎えた。

2 先輩のお手本

祭りは午後からだが、新人のための事前指導などがあるとのことで、早朝からの集合となった。

なお、事前に祭り用の白い法被が支給されており、当日はこれを着て集合するようと言われていた。法被は上下セパレートタイプで、本来は全裸に法被だけを身に付けるのが流儀らしいが、女子はさすがにパンツだけは履いても良いとのことだった。ただし、ブラジャーを着けることは許されておらず、パンツだけ履いた状態で法被の上下を着るというスタイルで会場に向かった。

集合場所は、祭りの会場となる市のメイン通りの交差点。

既に前日の夜から交通規制がなされており、餅つき用の櫓も組まれていた。

櫓の上では、大白神使の先輩と思われる法被姿の男性が準備作業をしている様子が見える。

集合時間の10分ほど前に会場に到着した。櫓の手前に三角コーンで仕切られたスペースがあり、そこで、法被姿の先輩神使たちが10人ほど集まって待機していた。

紗良に今回の祭りへの参加を通知してきた佐野も法被姿で立っていた。

そして、佐野の隣には、先輩の弥生も居た。

(・・・弥生先輩、新人じゃないのにもう来てる。指導する側なのかな、すごいな…)

ほどなくして、後輩の梨花とその同期、そして紗良の同期たちも到着し、集合時間となった。

「よし、みんな集まったな。ではこれから、今日の祭りの事前指導を始める！」

佐野が言った。どうやら佐野は、大白神使の中でもリーダー的な立ち位置のようだ。

「今年は3年ぶりの開催だ。3年間楽しみに待っていた市民の前で、失敗は許されない。」

「新人たちも、今からやることをしっかり覚えて、気合いを入れて臨むように！」

普段は「温厚な先輩」という印象の佐野だが、今日はいつもと違って厳しい表情を見せている。そんな佐野の様子を見て、紗良も自然と気合いが入った。

「では、早速だが、まずは新入りの神使に自己紹介をしてもらおう。」佐野が続ける。

「新人神使の自己紹介も祭りの一部とされており、神様がご覧になっていると言われている。」

「今年も、神様が見ている前で、新人にはしっかりと自己紹介をしてもらおう。」

(・・・たかが自己紹介ぐらいで大袈裟な…) そんな表情で、紗良は梨花と顔を見合わせた。

「自己紹介は、そこにある小ステージの上に一人ずつ上がってやってもらおう。」

佐野は、餅つき櫓の前にある小さなステージを指差した。

数段の階段がついているその「小ステージ」は、高さが1メートルほどで、横幅は、人が5～6人ぐらいなら横に並んで立てるぐらい。奥行きは、大人が寝転べるぐらいのサイズだ。

自分たち新人が今から一人ずつ、このステージに上がって自己紹介をするということだ。

全員が見てる前で一人ずつ注目されると思うと、紗良は少し恥ずかしいなと思った。

「自己紹介のやり方だが、口で説明するより見てもらった方が早い。」

「既に経験している者に手本を見せてもらおう。森野、前に出て自己紹介！」

佐野が弥生を指名した。

「はいっ！！」 弥生が大きな声で返事をして、ステージに上がった。

(・・・弥生先輩、もしかして、このために来たの・・・?)

(・・・っていうか、自己紹介のお手本なんて、そんな難しいことするのか・・・??)

紗良も梨花も、他の新人たちも、軽い気持ちで弥生を見ていた。

しかし次の瞬間、目を疑う光景を目の当たりにすることとなった。

なんと、**ステージ上の弥生が、法被のズボンを膝下までおろしたのだ。**

「えっ・・・!？」 紗良らは思わず声を上げたが、佐野に「黙って見る！」と叱られた。

幸い、法被の上着の丈がそれなりに長いので、パンツが丸見えという状態にまではなっていないものの、**弥生が法被のズボンを下ろし、下半身がパンツだけの状態となっているのは事実だ。**

(なんでこんな格好に・・・!?) 紗良がそんな言葉を飲み込むや否や、さらに衝撃が起こる。

弥生が、法被の上着を首元あたりまで捲り上げたのだ!

もちろん、紗良らも事前に言われてそうしているように、**ブラジャーはつけていない。**

つまり、**上半身がほぼ裸となったわけだ。**

弥生の大きな乳房、ベージュ色の乳輪、そして乳首まで、目の前に全てが見えている。

そんな恥ずかしいはずの姿のまま、弥生はじっとこちらを見ている。

先輩神使たちも、その状況を当然のこのように見守っている。

(・・・どういうこと!? 男の人もたくさんいる中で胸を出すなんて!)

(・・・そもそも、なんでみんな真顔で見てるの!?)

紗良も梨花も、口を覆って目を見開いた。他の女子たちも同様に啞然としている。

しかし、不思議なことに、同期の男子たちは動揺している様子がない。目のやり場に困っている様子はありながらも、この状況を受け入れている様子に見えた。

もしかして、彼らだけは事前にこのことを聞いていたのだろうか・・・?

混乱しながらそんな考えを巡らせていると、佐野の声が聞こえた。

「森野、それは正しい作法か? そのまま自己紹介を進めて良いのか?」

何かが間違っているとでも言うのだろうか。すると、弥生は、

「あ、え、、、っと、すみません、あ、あの、**正式な形**でやらなきゃダメでしょうか・・・」
口ごもりながらも、佐野に懇願するように問いかける。

しかし佐野は、

「当たり前だ! これから新人にやらせるのに、正式な形を見せないとできるわけないだろ!」と
厳しく言い放つ。

「は、はい、申し訳ありません。やり直しさせていただきます。」弥生は観念したように言う。
「ダラダラするなよ！あと、始める前に挨拶もあるだろ、忘れたのか？」
「すみません・・・」そう言いながら、弥生は**いったん法被を着直した**。
「よし、やり直し！！」佐野の号令に従い、弥生が動く。

「はいっ！自己紹介させていただきます！失礼します！！」

そう言って、**今度は、法被のズボンとパンツをまとめて膝下まで一気に下ろしてしまった**。

「えっ！？」紗良は息を飲んだ。

そして弥生は間髪入れず、先ほどと同様に**法被の上着を一気に首元まで捲り上げた**。
こうすることによって、**下半身を隠すものは何も無くなり**、法被の上着は胸より上にあげられた状態、つまり、**ほぼ全裸と言って良い状態**となったのである。

そして、**法被の上着を持ち上げたまま、背筋を伸ばして正面を真っ直ぐ見据え、大きな声で、**
「森野弥生です！よろしくお願いします！！」と叫んだ。
先ほどと同様、**乳房・乳輪・乳首は全て丸見えの上、今度は下半身を隠すものも一切ない**。
陰毛は、少し手入れされているようにも見えるが自然に生えているため、性器までは見えていない
のが、唯一の救いかもしれない。

(・・・なんてこと・・・これは現実なの??)一瞬の出来事に、紗良は啞然とした。
目の前で先輩がほぼ全裸になっている。しかも、**大勢の男性や職場の同僚までもが居る前で**。

「よし、良いぞ。そのまま続けて！」佐野が指示する。

「はいっ！！これから私の不浄な身体を晒します。神様のお力で、どうかお清めください！」
弥生はそう言って、**膝下まで下げていたズボンとパンツを足から外して脱ぎ捨て、法被の上着も脱ぎ去って床に置き、ついに、生まれたままの姿**となった。
手で身体を隠すことすら許されていないようで、弥生は全裸で真っ直ぐ前を見据え、気を付けの姿勢をとった。

そしてさらにここから、目を疑う光景が目の前で繰り広げられてゆくことになる。

(本編へ続く)